

## 相諸の上方後近世見るに本噺

坂口 至

近世上方語の様相を知るための資料は種々存するが、質の高さ、量的なまとまりを兼ね備えたものとしては、浄瑠璃本、歌舞伎脚本、洒落本、能狂言台本、噺本の五種に指折ることが可能である。特に、前二者が前期上方語の代表的な研究資料として最も頻繁に活用されて来たことは周知の通りである。しかし、これらは能狂言台本とともに、舞台芸能の詞章を書き留めたものであり、その伝承性から見て、後期上方語の資料としては或る弱さを持っていると言わざるを得ない。また洒落本はその写実性の高さから、後期上方語の代表資料と言えるが、遊郭という特殊な社会を扱っているため、位相上の偏りが予想される。最後の噺本は、ほぼ近世全般に亘って存在しているという特徴があるが、これまではその口語的写実性が他のものより相対的に劣るという評価を受け、余り利用されていない。要するに、これら五種の資料は、それぞれに何等かの意味で長所と短所を併せ持っていると言うべきで、近世上方語の実態に迫るためには、それらの長所を最大限に活かし、相互に短所を補うという態度で臨む必要があるだろう。

そこで、本稿ではこれまで最も活用されることの少なかった噺本に照明を当て、その資料価値を明らかにするために、とりあえず言語的特徴の記述を試みたいと思う。

## 二

先述の如く、上方嘸本は近世二百数十年に亘ってほぼ連続的に資料が存在するが、ここで扱うのは、後期の短い時期、具体的には安永年間（一七七二—一七八一）の嘸本である。後期に時代を設定するのは、先に述べた如く前期上方語の様相は浄瑠璃本や歌舞伎脚本でほぼ明らかになっているが、後期は洒落本以外資料が手薄で、記述の及んでいない部分が多いからである。安永という時期を選んだのは、上方嘸本が、爆発的に隆盛した江戸小咄本の刺激を受け旧態から脱却した時期にあたり、その言語が、上方語の変遷を考える際の一種の里程碑となる可能性もあると思われるからである。

さて、近世後期上方語資料としての嘸本の評価は、島田勇雄氏の「口語性は不同で、会話の多いものもあるが、概して会話の部分が少なく口語資料としての価値の乏しいものが多い。ことに他書からぬすみどりしたり、旧版の柱をけずり改題して新版らしく売出すものがあつたりで油断がならぬ」ということばに代表されるように、総じて低い。これは、やはりこの時期、洒落本という口語的写実性の高い資料が一方にある故の発言と考えられる。しかし、既に述べた如く、洒落本のことばには位相的な偏りがあり、その点は嘸本の方が優っているようである。島田氏も先のことばに続けて「各階層の人物が登場するので、ただ言語的には好都合である」と付け加えておられるのである。<sup>2</sup>これとは対照的に、島田氏の言われる嘸本の書誌的な問題は充分に考慮すべきである。さらに、嘸本には前期以来独特の文体が形成されて、根強く後の本に継承されて行つたという事実も注意しなければならない。<sup>3</sup>この、書誌と文体の問題については、別に考察する機会を得たく思う。従つて、本稿はあくまで資料の言語事実の記述にとどまるもので、それらの問題を含めた総合的判断は今後に待つことにしたい。

次に、本稿で扱う安永期嘸本は、次の七本である。

『軽口大黒柱』(安永二年、一七七三、半紙本五卷五冊、三十一話)  
 『軽口五色帯』(安永三年、一七七四、半紙本三卷三冊、四十一話)  
 『年忘断角力』(安永五年、一七七六、半紙本五卷五冊、四十八話)  
 『立春断大集』(安永五年、一七七六、半紙本十卷十冊、九十三話)  
 『夕涼新話集』(安永五年、一七七六、半紙本五卷五冊、百話)  
 『時勢話大全』(安永六年、一七七七、半紙本五卷五冊、五十話)  
 『時勢話綱目』(安永六年、一七七七、半紙本五卷五冊、五十話)  
 以下、各本を引用する際は、記述の都合上それぞれを『大黒』『五色』『年忘』『立春』『夕涼』『大全』『綱目』と略記することにする。なお、底本にはすべて『断本大系』(東京堂出版)の九十一巻に翻字されたものを用いる。

## 三

本稿で記述する言語事項は、とりあえず文法を中心とした幾つかのものに限定しておきたいと思う。それは、勿論紙幅の関係もあるが、他にも理由がある。近世上方語のこれまでの研究が文法中心であり、それらと比較することによつて断本の言語的特徴が明確になると考えられるからである。ただ、中にはこれまでほとんど研究のなされていない事項も若干加えている。それは、稿者が上方語の変遷において重要と考え、今後の研究の発展が期待される事項である。以下、具体的には次の諸項目を順次記述していく。

## I 活用型の変遷

- 一 二段活用的一段化
- 二 ラ行下二段活用の四段化

三 サ行下二段活用 of 四段化  
 四 ナ行変格活用 of 四段化

II 活用形の変遷

五 サ行四段動詞連用形のイ音便  
 六 命令形語尾の「ヨ」と「イ」

III 活用語の派生

七 可能動詞の発達

IV 助動詞の変遷

八 意志・推量の「ウ」と「ヨウ」

九 打消の「ヌ」と「ン」

V 条件法の変遷

一〇 順接仮定条件の「ナラバ」と「ナラ」、「タラバ」と「タラ」

一一 順接確定条件の「ホドニ」と「ニヨツテ」と「ヨツテ」

一二 逆接確定条件の「ド(モ)」と「ケレド(モ)」

なお、以下の考察では、上方人の発話(会話)とそれに準ずる心中語に記述の範囲を限定する。いわゆる地の文の言語も、特に文体の問題として重要であるが、先述の方針に従って今回は割愛することとしたい。

四

I—II 二段活用 of 一段化

これは国語史上、古代語と近代語とを分かつ代表的な変遷事項の一つであり、研究も多い。中世後期から近世前期にかけての能狂言資料における研究<sup>5)</sup>、近世前期の世話浄瑠璃の研究<sup>6)</sup>、歌舞伎脚本（絵入狂言本）の研究<sup>7)</sup>、後期の洒落本の研究<sup>8)</sup>のほか、種々の資料に方言を加えた総合的研究もある。これらによれば、二段活用的一段化は、近世前期において既にかなり進行しており、元禄享保期の浄瑠璃資料や歌舞伎脚本資料で見ると、自立語では五〇%を越している（以下、比較資料の数値もすべて会話文のみ）。しかし付属語ではまだ二〜三%止まりである。これが近世後期になると、洒落本などの自立語では九〇%を越え、付属語でも五〇%前後の値を示す。

漸本では次のようになってゐる。（数字は延語数、以下特に断らない限り同じ）

自立語〜二段八（三音節六、四音節以上二）

一段五五（二音節五、三音節三七、四音節以上一三）

付属語〜二段一六

一段二

自立語の一段化率は八七%で洒落本などと遜色なく、付属語は用例が少ないが、一段化率は一一%で洒落本などにはかなり劣るにしても、前期に比べると高くなっている。自立語の二段例は、いずれも下二段で、位相的には武士一、医者一、田舎者二、その他の町人四で、やや偏りがありそうである。また、付属語の一段例は二例だけであるが、いずれも町人のことばである。

#### I—二 ラ行下二段活用的一段化

次項とともに、近世前期以降の上方語を襲った活用変化として知られているものである。これまで能狂言本、浄瑠璃本などを扱った研究<sup>9)</sup>、歌舞伎脚本を中心とした研究がある。「<sup>10)</sup>（サ）シャルル」（「オッシャルル」を含む）、「メサ

ルル」、「クダサルル」、「ナサルル」の四種に分けて見ていく。

(二) 「く(サ) シャルル」

敬語複合助動詞「く(サ)セラルル」の変化したもので、これまでの研究により、四種の中では最も早く四段化を完了したものである。既に、近世前期元禄く享保頃には四段化率九〇%を越え、後期ではほとんど一〇〇%となっている。<sup>12</sup> 斬本では、下二段五、四段五七となっており、四段化率は九二%である。内訳は、

未然形く下二段四、四段二  
連用形く下二段〇、四段九

終止連体形く下二段〇、四段一九  
已然形くナシ

命令形く下二段一、四段二七

となっている。未然形の下二段形はいずれも打消助動詞「ヌ」に上接する場合で、前期の様相を受け継いでいる。

(三) 「メサルル」

これまでの研究では、近世前期、近松世話浄瑠璃の四段化率七〇%強、歌舞伎脚本の四段化率五七% (但し、近松と同時期のもでは一〇〇%)、また近世後期洒落本で一〇〇%という数字が出ている。<sup>13</sup> 他の三形に比べて用例が少ない (特に後期) ので資料によって振幅があるが、「く(サ) シャルル」より若干四段化が遅れたものようである。斬本でも、連用形と終止連体形に一例ずつの二例しか見えないが、いずれも四段に活用している。

(三) 「クダサルル」

「クダサルル」は用例が比較的多いので、近世を通しての傾向が明確である。近世前期、近松世話浄瑠璃の四段化率七五%、歌舞伎脚本の四段化率四四% (近松と同時期のもでもほぼ同じ)、後期洒落本の四段化率八二%というのが、これまでの研究で明らかにされた数字である。<sup>14</sup> 斬本では全体の四段化率は八七% (下二段七、四段四五) で、洒落本に引けを取らない。活用形別に数字をあげると、

未然形く下二段二、四段〇

連用形く下二段五、四段二四

終止連体形く下二段〇、四段一

已然形くナシ

命令形く下二段〇、四段二〇

となつており、命令形・終止連体形く連用形く未然形の順に四段化率が高くなつていくことがわかる。これは、前期の浄瑠璃資料や歌舞伎脚本本資料の順序と全く同じであり、活用形ごとの変化順位は変わらぬまま、全体としての四段化率が上がつていく様子が良く窺われる。

(四)「ナサル」

これまでの調査では、近世前期近松世話浄瑠璃で四段化率二一%、歌舞伎脚本で四段化率一二%（近松と同時期のもので一四%）、近世後期洒落本の四段化率八三%という数字が出ており、<sup>15</sup>四種のうちでは四段化が最も緩慢である。

断本では四段化率三三%（下二段七一、四段三五）で、同時期の洒落本に比べるとかなり低い。活用形別では、

未然形く下二段四、四段五

連用形く下二段六四、四段一

終止連体形く下二段三、四段六

已然形く下二段〇、四段一

命令形く下二段〇、四段二二

となつており、四段化の順位は、命令形く終止連体形く未然形く連用形である。洒落本の調査では、命令形・終止連体形く未然形く連用形らしく、やはり同じ傾向を示す。

ところで、断本の全体の四段化率が洒落本に遠く及ばないのは、口語資料として問題の残るところであるが、むしろ洒落本の方が位相的に偏りがあるために、このような数字になつたとも考えることができる。というのは、断本の四段化例のうち、前期から用例の多い命令形を除いた各活用形の総数一三例を位相的に見てみると、そのうち一〇例までは女性の発話なのである。断本では全体の発話は男性の方がはるかに多いことを考えると、この数字は十分な意

味を持つはずである。つまり「ナサル」の四段化は女性の方がずっと進んでいるのである。洒落本が遊郭の女性とその相手をする男性の会話によって成り立っていることを考慮に入れると、その四段化率の高さは女性のことばに支えられていると言ってもよく、近世後期の口語の全体像としては、むしろ断本の方が実態に近いのではないだろうか。

### I—三 下行下二段活用の四段化

下二段動詞「合わする」「任する」などが「合わす」「任す」などと四段活用に變化し、下二段の使役助動詞「スル」「サスル」が「ス」「サス」とやはり四段活用に變化する現象も、近世になって目立つようになる。ここでは、動詞の用例が少ないので、使役助動詞の四段化に限って観察する。これまでの研究によれば、近世前期、近松世話淨瑠璃では四段化率一五%、歌舞伎脚本で四段化率四三%とまとめられるようである。<sup>17)</sup> 四段化の順位は、「スル」√「サスル」√「さスル」(動詞「する」に助動詞「スル」がついたもの)のようである。一方、近世後期の洒落本では八二%に上がっている。<sup>18)</sup> これに対して断本では、四段化率九四%(下二段二、四段三三)で、洒落本を上回る。やや詳しく述べれば、「スル」が四段化率一〇〇%(下二段〇、四段二七)、「サスル」は一例のみで下二段、「さスル」では四段化率八六%(下二段一、四段六)となっている。「スル」の四段化が最も進んでおり、近世前期の順位をそのまま受け継ぐ格好になっている。洒落本の下二段例は一五例中一四例まで男性話者によるものであるが、断本では男性もほとんどが四段であり、若干の問題が存する。近世前期も資料によって四段化率にかなりの差があり、なお考察の余地があるようである。

### I—四 下行変格活用の四段化

下行変格活用動詞「死ぬ」「去ぬ」の連体形が旧来の終止形と同じ形になり、已然形も變化する四段化現象について



は、詳しい研究があまりないようであるが、近世前期ではまだナ変活用の方が圧倒的に優勢のようである。近世後期の実態も、出現頻度が低いため、不明な点が多い。斬本でも三例しか拾えなかつたが、次のようにナ変二例、四段一例となつてゐる。

\*アノ七兵衛といふやつハ、そこへくるからいぬるまで、『五色』、卷十、二四下)

\*私が死ぬれば、おまへへげし人じやゆへ、『綱目』、卷十一、八七上)

\*開帳をしだら、其儘いぬぞ。『夕涼』、卷十、二九五上)

## II—五 サ行四段動詞連用形のイ音便

標記の現象、いわゆるサ行イ音便は、中世において最も盛行し、近世前期は既に退潮期にある。近松の世話浄瑠璃ではイ音便率一〇%足らずで、歌舞伎脚本では更に低いようである。ただ、「さす」(差・指・刺・鎖)のみは、イ音便が根強く残つており、近松の用例などではほとんど原形は見られないようである。この語のイ音便形は近世後期に至つても失われず、洒落本や、イ音便を廃した能狂言の一流派(和泉流)にも散見する。斬本も同様で、イ音便率は四%弱(イ音便三、原形七六)でしかなく、そのイ音便形も次のようにやはり「さす」に限られる。

\*そなたの在所を、さいて見せうが、(指す、『五色』、卷十、二〇下)

\*凡雲に骨さいたような (刺す、『大全』、卷十一、五四下)

\*二本さいて居る人が、ねつからごさりませぬ (差す、『綱目』、卷十一、八七下)

## II—六 命令形語尾の「ヨ」と「イ」

上一段・上二段・下一段・下二段およびカ変・サ変に活用する動詞、さらに下二段に活用する助動詞の命令形は、

中古以来語尾に「ヨ」を有するのが普通であったが、口語としては中世頃から「イ」に変化し始め、中世末期から近世にかけて一般化したようである。この現象については、元禄享保頃の浄瑠璃本や歌舞伎脚本による研究と、稿者によるキリシタン物や能狂言本を資料とした研究<sup>23</sup>がある程度である。これらによれば、庶民層のことばでは、既に中世末期頃には新形「イ」が八〇%以上を占めているが、武士層では元禄享保頃でも旧形「ヨ」の勢力はかなり強いようである。近世後期の研究は皆無であるが、断本の実態は次のようである。

上二段く「ヨ」四、「イ」五      上二段く「ヨ」二、「イ」〇  
下二段く「ヨ」三、「イ」一

カ変く「ヨ」一、「イ」一六      サ変く「ヨ」四、「イ」一〇

助動詞く「ヨ」三、「イ」一

全体としては、「イ」形化率七二%（「ヨ」形一七、「イ」形四三）で、中世末期頃よりも低い。これはやはり断本が、武士など多様な人物を登場させていることと関係すると考えられる。現に、武士の発話における命令形が五例見られる（上二段一、下二段一、カ変一、サ変二）が、いずれも旧形「ヨ」となっているのである。

なお、この変化現象も、活用型によつて遅速があつたらしく、キリシタン資料や狂言資料では、ほぼカ変▽助動詞▽サ変▽下二段▽上二段・上三段の順位となっている（下二段は用例ほとんどなく不明）。断本でも助動詞を除けば、大体同じ傾向を示すと言つてよいかと思ふ。

### Ⅲ一七 可能動詞の発達

「書ける」「飲める」などの、四段動詞から転じた下二段活用の可能動詞は、中世頃から現れ始め、次第に本来の可能表現、すなわち四段動詞未然形十可能助動詞「ルル」の形の位置を奪うことになるが、近世前期ではまだその勢力

それほど強くないようである。近世後期の実態は明らかでない。漸本では、次のような例を拾うことが出来る。

\* 下から星ほしがかてるものか。やねへあがってかちおれと、(搦、『五色』、卷十、一六下)

\* くまなくさへた所ところへどふもいへませぬ。(言、『五色』、卷十、二〇下)

\* 一ト足もあるけるものでハないといふ。(歩、『立春』、卷十、二三四下)

\* サテ呑メませぬ。イヤ、呑めくんと、(飲、『立春』、卷十、二三七下)

合わせて六語七例ほどで、これに対する本来の四段動詞未然形十可能助動詞「ルル」の形は一三語一五例ほど見えるから、漸本に関しては、可能動詞はまだ発達途次の段階と言えそうである。

#### IV—八 意志・推量の助動詞「ウ」と「ヨウ」

意志・推量の助動詞「ウ」を下接させる動詞・助動詞のうち、四段・カ変・ナ変を除く各活用のもは、中世末期以降、音変化あるいは形態変化に伴い、次第に助動詞「ヨウ」を分出させていくという現象が見られる。これまでの研究によれば、中世末期にまず上二段の「居る」「射る」がその魁をなし、近世前期元禄享保頃には、「見る」「着る」などの二音節上二段や、「出る」「寝る」などの二音節下二段に拡大しているようである。ただ、この問題は、表記と発音の關係が難しく、近世前期までの様相もなお不明な点がある。近世後期にいたっては全く研究がなされていない。漸本でも、表記との關係がやはり難しいが、結論的には前期とほとんど変わらないのではないかと考えられる。前期にまだ「ヨウ」を分出させていない、上二段・三音節以上下二段・サ変・助動詞は、漸本でも「ウ」の段階、すなわち発音的には才段拗長音に読むべきようである。

#### 上二段

\* それでもおまへ、あいそがつけふ。(尽くる、『大黒』、卷九、五一下)

## 三音節以上下二段

\* ホンニそふじや。身を投うといふに、『五色』、卷十、一八上

## サ変

\* これハマア、どふせうと、『夕涼』、卷十、二九三下

## 助動詞

\* 此年月がくらされうか。(△可能△、『夕涼』、卷十、三二四下)

最初の例は、遊女の発話であり、おそらく最も新しいことばの話し手である遊女にしてからこのようになっていたのを見れば、他は推して知るべきとも言えよう。ただ、問題なのは、これらと同時に存在する次のような表記の読みである。

## 上二段

\* デモ、あまりにおせいがつきやうとぞんじまして (尽くる、『五色』、卷十、七下)

## サ変

\* コリヤおもしろい。見物じようと (『立春』、卷十、二三七下)

この才段拗長音にも「ヨウ」を分出させた形にも読める表記は、判定の仕様が無い。古い「ウ」の発音の異表記なのか、新しい「ヨウ」の顕現なのか知るすべはないのである。これらに対して、三音節以上下二段や助動詞については、「ヨウ」と明らかに読める例は存しない。次の、

\* おまへさまに尋よふとぞんじました。『夕涼』、卷十、二八九上

のみは、女性のことばで「ヨウ」の分出とも疑われるが、「タツニョウ」とも読めることは言うまでもないだろう。本稿の範囲内では、唯一、

\*ばかに致してお目にかけようとして、『夕涼』、卷十、二九四下)

が確実に「ヨウ」を表すと考えられるが、発話者は江戸の町人である。助動詞「ヨウ」が東国において早く発達していることもよく知られている通りである。<sup>28)</sup>

#### IV—九 打消の「ヌ」と「ン」

この現象は、正確には文法に関する語の音的变化であるが、近世上方語の変遷の重要なものの一つと考えるので、ここで取り上げたいと思う。

打消の助動詞「ヌ」が音変化を起し、「ン」(文末ではおそらく軟口蓋音)となった現象については、概説書等で簡単に触れられるのみで、その変化過程や時期についての研究は見当たらないようである。概説書等によれば、近世初期までは、特殊な資料を除いては、「ン」の形はあっても孤例に近いが、元禄享保頃になると、ある程度まとまって見られるようになる。<sup>27)</sup> 管見の限りでは、一資料に比較的多く現れるものとして、歌舞伎脚本『好色伝受』(元禄六年、一六九三)が挙げられる。

断本の新形「ン」の比率は、九%弱(「ヌ」二五二、「ン」二四)で、まだ勢力はさして強くないようである。どのような場合に「ン」が現れやすいかを、まず文法的に見てみると、単純終止一〇、体言下接〇、助詞下接一四となっており、通常の体言が続く場合には「ン」化が起きていないことがわかる。また、単純終止と助詞下接を「ヌ」との比率で比較してみると、単純終止八%弱(「ヌ」一一九)、助詞下接二三%(「ヌ」九二)となっており、助詞が続く場合の方がやや比率が高い。その助詞下接でも、終助詞「カ」「カエ」「カイ」が来て、意味的に勧誘を表す場合が一四例中一三例までを占めている(一例「ソヤ」)。

\*自安寺へ参りなさらんか。『夕涼』、卷十、三〇七上)

\* 定めし空腹くうぷくであらふ。茶漬喰ちまじくはんか(『綱目』、卷十一、七七上)

\* 見にゆくが、お出んかへ。(『年忘』、卷十、一五三七)

これは、意味的なものより、後続音が関係しているものと考えられる。すなわち、この場合、後続子音が軟口蓋音の「k」であるために、歯茎音「n」を含む「ヌ」が、より調音位置に近い「ン」になりやすかったと考えられるのである。いわゆる逆行同化の一種と言えるであろう。次に、位相的にもかなりはつきりした傾向が出ている。全二四例中一五例までは町人女性および遊女の発話になるものなのである。先述のごとく、漸本における女性の発話頻度は男性に比べてかなり低いのであるから、この事実は有意味である。

V—O 順接仮定条件の「ナラバ」と「ナラ」、「タラバ」と「タラ」

指定の助動詞(および形容動詞語尾)「ナリ」の未然形に接続助詞「バ」がついた「ナラバ」と、完了の助動詞「タリ」の未然形に接続助詞「バ」がついた「タラバ」は、中世以降、順接仮定条件の表現形式としてよく用いられるようになる。そして、これらの形式から接続助詞「バ」を脱落させた「ナラ」、「タラ」も、中世後期頃から見られるようになる。近世に入ると、後者の勢力が強まり、例えば近松世話浄瑠璃では、「ナラバ」八八(接続詞的に用いられる「ソレナラバ」などは除く、以下同じ)、「ナラ」七八、「タラバ」六一、「タラ」九五という調査結果(28)が示すように、両者拮抗して用いられる状態となっている。しかし、同時期の歌舞伎脚本では既に「ナラ」「タラ」の方が「ナラバ」「タラバ」をかなり凌ぐ状況も見られ、資料による振幅が大きい。

近世後期の実態はこれまで不明であったが、漸本に限れば、

「ナラバ」 六 「タラバ」 二

「ナラ」 二七 「タラ」 三四

となっており、新形「ナラ」「タラ」の旧形に対する比率は、それぞれ八二%、九四%と、新形が圧倒的になっている。いずれの資料でも「タラ」の方が「ナラ」に先んじているようである。「ナラバ」「タラバ」が特にいかなる場合に残存しているかも見たが、位相などの条件でのほつきりとした特徴はなさそうである。

#### V—1— 順接確定条件の「ホドニ」と「ニヨッテ」と「ヨッテ」

原因・理由などを表す条件表現に接続助詞的に用いられる「ホドニ」、「ニヨッテ」などについては、既に中世く近世を覆う研究が出ている。<sup>30</sup> それによれば、中世では「ホドニ」が最も勢力が強く、近世前期以降「ニヨッテ」が伸長し、「ヨッテ」は本稿が扱う十八世紀後半から次第に姿を現すようである。また、これらの形式を含む前件と、後続する後件との間の意味文脈の違いによっても、現れ方が異なっていることも明らかにしている。

近世前期の実態を、この研究から借用すると、歌舞伎脚本『好色伝受』(一六九三)から近松世話浄瑠璃『女殺油地獄』(一七二二)までの一四種の資料では、「ホドニ」六九、「ニヨッテ」三六となっており、その出現比は、一・九対一である。「ヨッテ」はまだ現れていない。後期の洒落本の研究では、「ホドニ」三一、「ニヨッテ」六五、「ヨッテ」二九となっており、「ニヨッテ」が「ホドニ」を押さえている。

断本では、「ホドニ」「ニヨッテ」「三ヨッテ」五となっている。「ホドニ」と「ニヨッテ」の出現比は一対一・五で、洒落本同様前期と逆転している。もちろん、前件と後件の関係による現れ方が同一でないので、単純な比較はできないが、「ニヨッテ」の勢力が強くなっているのは事実であろう。その前件と後件との関係であるが、先の研究によれば、中世では「ホドニ」は後件に制限が見られず、事実の叙述・意志・推量・命令など様々な表現に用いることが出来たのに対し、近世に入ると次第に事実の叙述に用いられなくなり、後には命令表現に限られるようになるという。また、「ニヨッテ」は本来事実の叙述が大部分を占めていたが、近世後期になると命令・推量などの表現にも

用いることが増えてくるらしい。この観点から漸本を見ると、「ホドニ」はすべて命令か意志、当為を表し、事実の叙述の表現は無い。また、「ニヨッテ」はすべて事実の叙述である。つまり、「ホドニ」と「ニヨッテ」で、完全に役割を分担している。例を挙げてみる。

\* 湯のかけんハよいほどに、ぬか袋と手拭をくだされ（『五色』、卷十、一五下）

\* 母へ不幸になるほどに、ハ中略何時でも隙とつてやろふ。（『夕涼』、卷十、二九九下）

\* 集元が神道者じやによつて、稲荷さまをまつらるゝ。（『大全』、卷十、一六四下）

V—二 逆接確定条件の「ド（モ）」と「ケレド（モ）」

接統助詞「ド」と「ドモ」は上代以来頻用され、中世以降「ドモ」が一般的になったものの、ともに近世まで命脈を保った助詞である。一方、「ケレド（モ）」は、中世に助動詞「マイ」の已然形に「ド（モ）」が下接した「マイケレド（モ）」から生まれたものと言われ、漸時助動詞「ウ」「タ」などに広がり、近世前期頃には動詞・形容詞などにも下接するようになって、次第に「ド（モ）」にとつてかわるようになってきたらしい。しかし、これまで、両者の勢力関係などの詳しい研究はなされていない。漸本では、

「下」「二二」「ドモ」「二二」「ケレド」「五」「ケレドモ」「二二

となっており、まだ「ド（モ）」の方が優勢である。「モ」の有無によって用法に違いがあるということはなさそうである。ただ、いかなる語に下接するかという点では、有意差があるように思われる。次は、上接語の語性による分類である。

助動詞ナリ（指定）く「ド（モ）」「一」「ケレド（モ）」○



助動詞タ(完了)↳「ド(モ)」「二」「ケレド(モ)」「〇

助動詞タイ(希求)↳「ド(モ)」「一」「ケレド(モ)」「〇

助動詞マス(丁寧)↳「ド(モ)」「五」「ケレド(モ)」「一

助動詞ヌ(打消)↳「ド(モ)」「一」「ケレド(モ)」「一

助動詞ジャ(指定)↳「ド(モ)」「〇」「ケレド(モ)」「二

助詞↳「ド(モ)」「八」「ケレド(モ)」「三

形容詞↳「ド(モ)」「五」「ケレド(モ)」「〇

形容動詞↳「ド(モ)」「一」「ケレド(モ)」「〇

用例は必ずしも充分とは言えないが、これらの中で、助動詞ナリと助動詞ジャが同じ指定の意味ながら対照的な状況を示すのは、その語の歴史性を考えれば納得がいくであろう。注目したいのは、形容詞が「ド(モ)」「ばかりということ、これにはそれなりの理由が考えられそうである。すなわち、例えば「良けれど(モ)」「の形は、文法的には「ヨケレ・ド(モ)」「であるが、「ケレド(モ)」「が勢力を強めていく中で、「ヨ・ケレド(モ)」「と意識されるようになり、「ケレド(モ)」「の一種と見なされ、この形で安定しやすかったのではないかと思われるのである。つまり、言語学で言う「異分析」(メタナリシス)の例である。なお、両者の位相的差異は、この断本では明確でない。

## 五

以上、近世後期の一時期である安永年間の上方語の実態を、断本の文法現象を中心に記述してみた。言語量が予想した程多くなく、批判に充分耐えられない部分もあるかも知れないが、おおよその所は記述し得たかと思う。個々の言語現象では、止むを得ず記述を省略したところもあるが、それらはこれまでの研究にことさら付け加える必要を認

めなかつたものである。漸本に特徴的な、あるいは今後の研究に示唆を与え得ると思われる点については、極力触れるようにしたつもりである。

今回の記述で触れた限りで言えば、漸本の近世後期上方語資料としての価値は、洒落本にそれほど劣るものではない。位相上の言語差についても、比較的よく書き分けていると言えらるかと思う。

近世上方語の特徴としては、これらのほかに、待遇表現が非常に発達していることが挙げられる。これを無視しては言語資料としての価値判断を誤ることになる。次の機会を得て、検討してみたいと思う。

## 注

- (1) 島田勇雄「近世後期の上方語」(『国語と国文学』三六・一〇、昭三四) 参照。
- (2) 武士、町人、遊女のほか、田舎者、東国者、奴、さらに鬼神の類から動物などを擬人化したものまで見られる。位相上重要なのは、前三者であるが、これらは町人の男性が特に多く、町人の女性、遊女、武士の順となる。武家の女性はほとんど現れない。
- (3) 中村幸彦「型の文章」(『文学・語学』四五、昭四二) が参考になる。
- (4) 遷者の違う同名の書(ともに五巻五冊)を併せて扱う。
- (5) 蜂谷清人「狂言古本に見られる一段活用化の現象」(『国語学』七四、昭四三)、小林賢次「版本狂言記における二段活用的一段化について」(『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』二五、昭五六) 参照。
- (6) 坂梨隆三「近松世話物における二段活用と一段活用」(『国語と国文学』四七・一〇、昭四五) 参照。
- (7) 山県浩「活用型の変化から見た上方絵入狂言本―二段活用的一段化の場合―」(『語文研究』五二・五三、昭五七) 参照。
- (8) 奥村三雄「近代京阪語考」(二)―二段活用の残存―(『岐阜大学教育学部紀要人文』一五、昭四二)、矢野準「近世後期上方語資料としての上方板洒落本類」(『語文研究』四一、昭五一) 参照。
- (9) 奥村三雄「所謂二段活用的一段化について―方言的事実から史的考察へ―」(『近代語研究』二、昭四三) 参照。

- (10) 坂梨隆三「ラ行下二段活用 of 四段化」(『国語と国文学』五二・一、昭五〇) 参照。
- (11) 山県浩「活用型の変化から見た上方絵入狂言本→ラ行下二段活用 of 四段化の場合」(『文献探究』一一、昭五八) 参照。
- (12) 注(11)の山県論文参照。
- (13) 注(12)に同じ。
- (14) 注(12)に同じ。
- (15) 注(12)に同じ。
- (16) 注(2) 参照。
- (17) 山県浩「活用型の変化から見た上方絵入狂言本→ラ行下二段活用 of 四段化の場合」(『文献探究』一〇、昭五七) 参照。
- (18) 奥村三雄「近代京阪語の使役辞」(『国語国文』三六・一、昭四二)の末尾の一覽表の数字を集計したものである。なお、使役助動詞の認定もこれに従った。
- (19) 坂梨隆三「近代の文法Ⅱ(上方篇)」(『講座国語史四 文法史』、昭五七)、拙稿「紀海音の用語意識―韻律の観点から」(『文献探究』一八、一九、昭六一、六二) 参照。
- (20) 奥村三雄「サ行イ音便の消長」(『国語国文』三七・一、昭四三) など参照。
- (21) 前注の奥村論文、および拙文「古狂言諸本のサ行イ音便」(『国語学会昭六一年度秋期大会要旨』) 参照。
- (22) 山崎久之「命令形の接尾辞と終助詞『よ』『い』『いよ』『いよ』」(『近世上方語について』) (『群馬大学教育学部紀要』二二、昭四七) 参照。
- (23) 拙稿「近世前期京阪語の命令形語尾『ヨ』『イ』について―古狂言本を中心に―」(『奥村三雄教授退官記念 国語学論叢』平一) 参照。
- (24) 坂梨隆三「いわゆる可能動詞の成立について」(『国語と国文学』四六・一一、昭四四) 参照。
- (25) 大塚光信「助動詞ヨウについて―その成立と性格―」(『国語国文』三一・四、昭三七)、注(19)の拙稿など参照。
- (26) 外山映次「洞門抄物に見える助動詞ハヨウについて」(『国語学』四六、昭三六) など参照。

- (27) 湯沢幸吉郎『徳川時代官語の研究』(昭一一)など参照。
- (28) 小林賢次「条件表現形式としての『なら』『たら』の由来」(『国文学官語と文芸』五四、昭四二)参照。
- (29) 注(19)の拙稿参照。
- (30) 小林千草「中世口語における原因・理由を表わす条件句」(『国語学』九四、昭四八)、同「近世上方語におけるサカイとその周辺」(『近代語研究』五、昭五二)参照。
- (31) 奥村三雄「近代京阪語考―順説表現の助詞について―」(『岐阜大学教育学部研究報告人文』一四、昭四二)参照。
- (32) 西田絢子『「けれども」考―その発生から確立まで―』(『東京成徳短期大学紀要』一一、昭五三)参照。